新聞から時代読み命守る

教育に新聞をどのように活用できるかを考える「第30回NIE全国大会」（日本新聞協会主催、神戸新聞社など主管）が7月31日～8月1日、神戸市で開かれた。スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」で、約1800人の教育・新聞関係者が集まった。

神戸でNIE全国大会

第30回NIE全国大会で開かれたパネル討論＝7月31日、神戸市

正確な情報 体験の記憶伝え

1日目の全体会では、大会実行委員会の竹内弘明委員長が基調提案として、真偽不確かな情報が社会にあふれ、インターネット上の悪口や中傷で人の命が奪われることもあると指摘。「正確な情報を取捨選択し活用する能力を身に付け、インターネットとうまく付き合うために、新聞やNIE活動は有効だ」と述べた。

パネル討議には、日本新聞協会NIEアドバイザーで兵庫県西宮市立浜脇中の渋谷仁宗主幹教諭らが参加した。高校生だった1995年、阪神大震災で被災した渋谷教諭は、何もできずもどかしい思いをしたという。そうした自身の経験をもとに、新聞を通じて防災や減災を考えてもらう授業を行ってきた。「これからの災害に向け、生徒が自分事として考えられるよう取り組みたい」と話した。

司会を務めたジャーナリストの池上彰さんは「伝える側にとって一番大事なことは、情報を正確に早く伝えることだ」と強調。その上で、記録だけでなく戦争や大災害を体験した人たちの記憶を次の世代に伝承するのは、地元の新聞の役目だと締めくくった。

記念講演では、作家の小川洋子さん（岡山市出身）が登壇した。

2日目は分科会として公開授業や実践発表が行われ、熱心に意見が交わされた。同級生同士が、自分が選んでスクラップした記事の意見交換をした結果、それぞれの興味や関心の対象が広がった、とする報告もあった。

来年の全国大会は広島市で開かれる予定。

小川洋子さん講演要旨 広い世界知り想像力育んで

小川洋子さんの講演要旨は次の通り。

◇

自分とは価値観が違う他者のことを想像し、言葉でつながれるのは、人間だけ。だからこそ想像力を育むことが重要だ。

例えば人間には、誰かが「死にたい」と言ったとしても、心の中では「死にたくない」と思っていることを感じ取る力がある。交流サイト（SNS）は、小説や新聞と違い、言葉を文字通りにしか受け取れない。言葉の向こう側を感じることができないと思う。

人間の心に届きやすいのは、五感に直接訴えかけてくる物だ。紙の感触やインクのにおい…。かつて「源氏物語」の時代は、文字を書こうとすれば竈をする運動から始まった。デジタルの時代では、肉体が置いてけぼりにされている気がする。

今の自分が関心がない世界の方が何千倍も広く、それを知れば大事なことと出合えるかもしれない。その意味で、さまざまな情報が視界に全部収まる新聞は魅力的だ。

講演する小川さん＝7月31日、神戸市

おがわ・ようこ　1962年岡山市生まれ。早稲田大第1文学部卒。88年に「揚羽蝶（あげはちょう）が壊れる時」でデビュー。91年「妊娠カレンダー」で芥川賞。代表作に「博士の愛した数式」「密（ひそ）やかな結晶」など。2021年に紫綬褒章を受章し、菊池寛賞にも選ばれた。兵庫県西宮市在住。

兵庫・西宮市立浜脇中 NIEノート活用

持ち寄ったNIEノートを掲げる浜脇中の生徒ら＝1日、神戸市の印南大

社会に関心 広がる視野

兵庫県西宮市立浜脇中は、興味や関心を持った新聞記事などを切り貼りした「NIEノート」を使う公開授業を行った。3年生29人が個別に選んだニュースを持ち寄り、自身の考えや感想を発表し合った。

NIEノートは、一人一人が気になる記事を貼り付け、感想や意見を自由に書き込む"スクラップ帳"。同校では全生徒約800人が活動に取り組み、社会科の授業で同じ読みをしたり、互いに意見を述べ合ったりして記事への理解を深めている。

公開授業に参加した生徒は7グループに分かれ、ノートを開いて意見交換。グループの代表が前に出て発表し、チケットを買わない限り立ち食いを強制される大阪・関西万博のフードコートや、未成年者に遺骨運動の自由を認めるよう提訴した高校生―などの話題について意見を述べた。

ロシア・カムチャツカ半島付近を震源とする地震を取り上げた生徒は、インターネット上で拡散する情報の信ぴょう性を巡り、総務省が注意を呼びかけたことに注目。当初、自分が住む地域に「津波警報が発令」との情報が入ったが、調べてみると津波注意報だったと振り返り、「記事にもあるが善意の拡散がデマを生む。メディアリテラシーは命を守るためにも大切」と呼びかけた。

指導する渋谷仁宗主幹教諭(46)は「生徒が新聞記事を自分事として捉えて読むようになり、社会的視野が広がっていると感じる」と強調。新保花歩さん(15)は「この授業がなければニュースに興味がなかったけれど、最近は『このニュース、授業で考えたことがあるな』と思う機会が増えた」と学習成果を語った。（上野俊樹）

兵庫・姫路市立豊富小中 地方紙を読み比べ

東日本大震災の記事を読み比べ、話し合う豊富小中の児童たち＝1月、神戸市の印南大

発信者の思いを考える

兵庫県姫路市立豊富小中は公開授業「新聞で開くメディアリテラシー全国の子ども新聞から迫る、情報の向こう側～」を行った。東日本大震災を取り上げた地方紙を読み比べ、発信者の意図や思いへ考えを巡らせた。

小学6年生24人が今年3月に岩手、茨城、静岡、福岡県で発行された東日本大震災に関する子ども新聞を読み、グループで意見交換。「震災被害が大きかった岩手は子どもの写真を使っている。経験していない世代にも伝えたいからでは」「南海トラフ地震の危険がある静岡は見出しが問いの形。読者に知識を持たせることで被害を減らしたいのだと思う」などと発表した。

さらに、震災約3カ月後と震災から14年たった今年3月の神戸新聞も比較した。被災者の証言を鮮明にまとめた発生3カ月後の記事は「記者が俯瞰で書いているから物語のよう」。一方、宮城県南三陸町の旧防災対策庁舎で娘が行方不明になった父親を取り上げた今年の記事について「『娘がいた場所　つれえけど』の見出しで庁舎保存に反対の人がいることも表現している」などと気付いた点を挙げた。

授業には記事を書いた神戸新聞の上田勇紀記者(43)が登壇。「兵庫の読者に何を伝えるかを考えた。今年の記事は震災を考え続けた被災者の14年間の気持ちに焦点を当てた」と解説した。

指導した前野翔大教諭(38)は「同じテーマの情報でも地域と時期によって違うと気付くことで、情報の後ろには人がいることを理解できたのではないか。受け取った情報をうのみにせず、一歩引いて緩やかに捉えられるようになってほしい」と話した。（中川結）